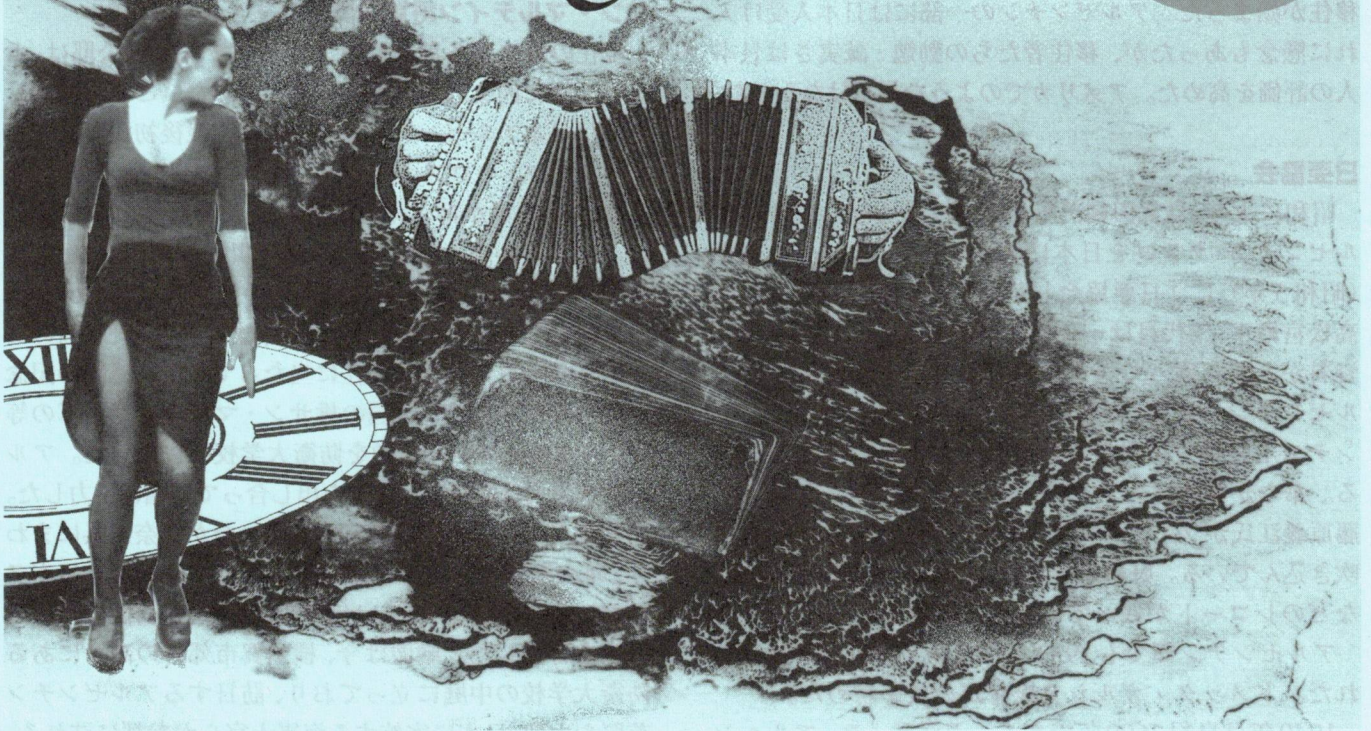


Argentina

No.50



© 星野 美智子

社団法人 日本アルゼンチン協会 会報

2007年7月

日ア交流とアルゼンチン協会	1	ブエノスアイレス国立美術館に	
アルゼンチン祖国の父、		先住民作品常設展	10
ホセ・デ・サン・マルティン将軍	3	タンゴ名曲物語 (2)	12
「50年読みつがれる書物にしておきたい」	6	Resumen en castellano	13
アルゼンチン政治経済短信	7	協会のイベント案内	14
今、ブエノスアイレスが面白い!	9	協会の活動報告	14

日ア交流とアルゼンチン協会

河崎 勳

「日本アルゼンチン協会」は、日ア両国交流の歴史の中で役割を果たしてきた。今年は、協会が社団法人になってから50周年である。前身の「日亜協会」が創立された時から数えると77年目。喜寿の年とでもいうべきか。

平等条約

個人としてのアルゼンチン人と日本人がいつも友好関係にあったかどうかは分からない。しかし国と国のつき合いでは、日本とアルゼンチンはまぎれもなく友好関係を続けてきた。

明治政府が1898年にアルゼンチンと結んだ修好条約は、メキシコ、ブラジル、チリに次ぐ平等条約であった。この調印は、不平等条約改正交渉に腐心する明治日本の外交官たちを勇気づけ、日露戦争後の欧米諸国との条約改正への道を開いた。

軍艦「日進・春日」

日亜修好条約調印から5年後、日本は避けられない日露戦争を前にして軍艦不足に困っていた。この時日本は、ロシアと争奪戦を演じたあと、アルゼンチンが建造

し終えたばかりの新鋭巡洋艦を有償で譲り受けることに成功した。1903年である。これが日本海海戦勝利に大きく貢献した「日進・春日」の2隻である。アルゼンチンは、英国とのよしみで日本に友好的であった。

日露戦争の少しあとぐらいから日本人のアルゼンチン移住が始まった。アルゼンチンの一部には日本人受け入れに懸念もあったが、移住者たちの勤勉・誠実さは日本人の評価を高めた。アメリカでのような排斥はなかった。

日亜協会

昭和に入り、目賀田綱美男爵がパリから帰ってきてアルゼンチン・タンゴを日本に紹介した少しのち、1930年(昭和5年)に「日亜協会」が創立された。初代会長は高松宮殿下、二代目は一条實孝公爵である。このころの資料があまり残っていないが、1933年には東京で、「アルゼンチンの夕べ」が開かれ、アルゼンチンダンス・コンテストで目賀田男爵が審査員をしたという記録がある。華やかな社交クラブを偲ばせる。少しあとになって藤原義江氏がブエノスアイレスでアルゼンチンタンゴを吹き込んでいる。好事家の手許に「Alma del Bandoneon」などのレコードが残っているはずである。

アルゼンチン側でも1933年に日亜文化協会が設立された。ドメック・ガルシア提督が会長を務めた。

1940年は皇紀2600年である。巡洋艦「ラ・アルヘンティーナ」が寄航し、この時運んできたボカの画家キンケラ・マルティンの絵が以来今に至るまで総理官邸に飾られている。

アルゼンチンの中立

日本が第二次大戦に突入したのは1941年であるが、アルゼンチンは、米州21か国外相会議で日本非難決議案に反対し、アメリカなどの圧力を受け流して長い間中立国の立場を貫いた。最終的に参戦したのは終戦の5か月前だったが、このあともアルゼンチンの人たちは日本人に同情的であったと移住先駆者の賀集九平氏は記述している。コルドバ州のホテルに収容された日本大使ら外交官、武官はゴルフやテニス、乗馬もできたという。

日本アルゼンチン協会

東京の「日亜協会」は戦争で活動を停止していた。

1950年昭和25年5月25日、サンフランシスコ条約を待たず、有志が「日本アルゼンチン協会」を立ち上げた。アルゼンチン全権公使(大使)であった内山岩太郎神奈川県知事が会長になり、日亜協会のメンバーを引き継いだ。大阪商船、八幡製鉄、富士製鉄などが有力支援メンバーとなった。アルゼンチンを訪れたことのある田中耕太郎最高裁長官、星島二郎代議士(のち衆院議長)、藤原義江氏らが役員に加わっていた。1953年協会が東京で開いた「アルゼンチンの夕べ」は、藤原義江、古賀政男両氏の訪ア感想談、早川真平オルケスタティピカ東京、坂本政一オルケスタ・ティピカ・ポルテーニャの演奏、藤

沢嵐子の歌で盛況であった。協会は、ダンスパーティーや両国外交代表の赴任・帰朝歓送迎会をしばしば開いた。

1957年、協会は「社団法人日本アルゼンチン協会」として認可された。

サン・マルティン将軍胸像

現在の地に移る前の駐日アルゼンチン大使公邸は、六本木の緑に囲まれた優雅な邸宅であった。ここを斡旋したのは日本アルゼンチン協会である。戦後初代大使としてカルロス・キロス大使が赴任してきた時、都内の主な建物は進駐軍が押さえており、大使公邸探しが難航した。日本アルゼンチン協会は須賀川太郎常任理事(大阪商船)らの努力で東京六本木近くの日本人邸宅を公邸として斡旋した。この公邸は1992年まで40年間使われた。

1956年キロス大使は帰任に当たって日本に感謝の記念を残したいとして、建国の雄サン・マルティン将軍の等身2倍大のブロンズ胸像を防衛大学校に寄贈した。アルゼンチン大使館員らも基金を出し合って寄贈に協力した。当初東京都への寄贈が考えられていたが神奈川県にまわり、軍の関係ということで防衛大学校になった。日本アルゼンチン協会は、その3年後の1959年に胸像のための台座を寄贈した。胸像は今、横須賀市郊外の高台にある防衛大学校の中庭に立っており、訪日するアルゼンチン首脳や大使、日本に寄航する海軍士官らが参拝に訪れる。

1961年は、協会がフロンディシ大統領訪日歓迎パーティーを開き、時を同じくして訪れたフランシスコ・カナロ楽団の公演を後援・協力するなどの華やかな年であった。日本人がタンゴを好きなことはアルゼンチンでも広く知られている。

内山岩太郎会長は豪快な性格と外交官生活で身につけた国際感覚で、神奈川県でも日本アルゼンチン協会でも多くの事業を推進した。1966年日本人移住者の釣り仲間高市茂氏や光田正氏らがアルゼンチンの魚ベヘレイの日本移殖を申し出たところ即座に同意し、空輸されたベヘレイの卵が神奈川県の試験場で孵化され育てられた。ベヘレイは埼玉県の安田直弘氏に引き継がれ事業として養殖が続いている。

スペイン語講習会は1958年、協会の会員企業の社員を対象に始まった。協会評議員の笠井鎮夫東京外語教授や南雲克太郎事務局長、外国人らが指導し、受講希望者は常に定員90名を越えていた。一時途絶えた講習会は、2000年に復活し、アルゼンチン大使館員夫人らがボランティアとして講師を務めている。1967年社団法人発足10年を記念して『日本アルゼンチン協会の歩み』の小冊子が発行された。いろいろな人物交流があった中で、1979年には文豪ルイス・ボルヘスが訪日している。

マルビーナス(フォークランド)戦争

1982年マルビーナス(フォークランド)戦争が起きた時、日本はEU諸国によるアルゼンチン経済制裁には加わらず中立を守る努力をした。後にアルゼンチン大統領が日

本に感謝の意を述べている。アルゼンチンの特使フラギオ提督が自国の立場をアピールのため訪日した際、日本アルゼンチン協会は中南米記者会と協力してジャーナリスト・有識者・経済人を集め、特使に演説の場を提供した。

修好100周年

1997年、天皇皇后両陛下がアルゼンチンを訪問された。アルゼンチンからはこれまでに4人の現職大統領が訪日している。

1998年は、日ア修好通商条約100周年である。両国でさまざまな記念行事が行われた中で「日本アルゼンチン協会」は、記念事業組織委員会との協力で『日本アルゼンチン交流史～はるかな友と100年』を編纂・出版した。ドメック・ガルシア提督が日露戦争のあとアルゼンチン海軍に提出したぼう大な海戦記録は、のちに海上自衛隊に寄贈され津島勝二氏（海上自衛隊）が隊内の教育資料用に日本語に訳していた。協会は記念事業として1998年にこれも出版した。

1998年には早稲田大学と協会が共催でアルゼンチンをテーマにした早稲田大学オープン・カレッジを開き、12回のカリキュラムを組んだ。この年、大阪市とブエノスアイレス市が友好提携都市協定を結んだ。

アルゼンチンの日本語学校は日本語図書の不足を訴えていた。ブエノスアイレスの日本語学校「日亜学院」と日本アルゼンチン協会の共同作業で、秋篠宮殿下がブエノスアイレスの修好100年祭に出席されたのを記念して、日亜学院の中に「秋篠宮文庫」を1999年に発足させた。協会が日本の出版社から5,000冊の日本語図書を集めて送り出した。アルゼンチン政府はこの文庫を国家公益文化事業として政令指定した。指定団体には、アルゼンチン国内出版の文学、歴史、音楽などの図書を贈られることになっている。

100周年のころの会長は齋藤英四郎氏（新日鉄、経団連）で、専務理事・理事長として実質的に会を運営していたのは野村秀治氏（商船三井）である。齋藤英四郎氏は18年間日本アルゼンチン協会会長を務めた。

アルゼンチン大使が公邸を提供する年2回の会員懇親

パーティー、大学との共催による時事講演会、タンゴの会、晴海横須賀間の体験航海とサン・マルティン將軍胸像献花などは2003年に始まった。日本海海戦100周年に当たる2005年には、ドメック・ガルシア提督の翻訳本の版を改め『日本海海戦から100年～アルゼンチン海軍観戦武官の証言』として出版した。

アルゼンチンの移住者の団体「在亜日系団体連合会」が営々と進めていた『アルゼンチン日本人移民史』は、戦前編、戦後編、それぞれのスペイン語版の4部作が2006年に完成した。土屋義彦現会長が日本での賛助金集めに協力し出版の実現に大きく貢献した。

遅かな友

このようにまとめて見ると、多方面にわたる日ア交流の中で、「海軍」「タンゴ」「移住」で両国の関係が深い。この交流の中で「日本アルゼンチン協会」が果たしてきた役割は上に述べた。

日本がこれまで政治的に同盟を結んだ相手国は、英国、独伊、それに米国である。しかし英、独、米とは同盟関係と別の時期には戦火を交えている。同盟ではない形で友好関係を結んできた国はいくつかある。メキシコやトルコは、日本の漁民が遭難船員を救助したことから友好関係が始まった。アルゼンチンとはそういう事件はなかったが、軍艦の譲渡でやはり海と因縁のある間柄である。

概観してきたように、日本とアルゼンチンは友好関係が続いている。一つには地理的に遠く離れ利害が直接衝突しないことがある。また、アルゼンチンはこれまで労働力が不足していたのに反し日本が過剰人口を抱えていたこと、移住して行った日本人が勤勉、誠実で信頼を勝ちえたこと、経済構造が片や農牧产品中心、片や工業品製造中心で国際市場でも争う理由がなかったことなどがあげられる。一方で、20世紀後半からのアルゼンチン経済悪化で、日本の投資家が購入していた債券が大きく価値を下げアルゼンチン経済への信頼が失われているのは残念なことである。

（かわさき いさお；当協会理事）

アルゼンチン祖国の父、 ホセ・デ・サン・マルティン將軍 ～將軍胸像花輪奉呈式典に三大使参列～

加藤 勝巳

平成19年5月30日（水）、防衛大学校（横須賀）内のサン・マルティン將軍胸像前にて、ポルスキ駐日アルゼンチン大使、カルバージョ駐日チリ大使、パルマ

駐日ペルー大使並びに五百旗頭（いおきべ）防衛大学校長の4氏によるサン・マルティン將軍胸像への花輪奉呈式が挙行された。大学側からは各副校長及び各部門

長が参列し、アルゼンチン大使館からはオセーラ公使、各大使館からの随行人、日本アルゼンチン協会、日本チリ協会・日本ペルー協会事務局長が参列した。当協会からは、木島副会長兼理事長、白鹿・加藤の両常務理事、河崎理事の4氏が参列した。

アルゼンチン人にとって、サン・マルティン将軍は歴史上最も勇敢にして、尊敬している人物であり、アルゼンチンをはじめとして、南米大陸をスペイン植民地支配から解放させた自由と独立の指導者として、人々の心に生きております。

将軍は、各地で独立戦争に勝利を取め、アルゼンチンでは、1810年5月25日にブエノスアイレス市議会が独立を宣言し、続いて、1816年7月9日に、ツクマン市において南米諸州連合代表が独立宣言をしました。この両日が独立記念日として、国民の祝日になっていること、ご高承のとおりです。

式典当日、サン・マルティン将軍胸像前にての三大使の挨拶内容を、ここに紹介します。

ダニエル・D・ポルスキ アルゼンチン大使の挨拶

アルゼンチン共和国大使として、われわれの歴史上最も優れた人物であり、独立の指導者であるホセ・デ・サン・マルティン将軍への献花は、私にとりまして大変名誉なことでもあります。このような機会を設けて下さいました防衛大学の五百旗頭 真学校長、ご出席のチリ大使ダニエル・カルバージョ様、ペルー大使ウゴ・バルマ様に感謝申し上げます。また、ご同行下さいました日本アルゼンチン協会、日本チリ協会、日本ペルー協会のメンバーの方々にもお礼を申し上げます。

ホセ・デ・サン・マルティンは、ラテンアメリカ大陸の独立という崇高な目的のために戦い、生涯を捧げた「ラテンアメリカ人」であります。将軍は、与えられた使命に対する真摯な自覚、人類愛、解放への不退転の覚悟をもって先頭に立ちました。

サン・マルティンの優れた戦略は、軍事面にとどまらず、南米の闘争をいかに展開すべきかに亘っておりました。将軍の目的は、優れて政治的なものであり、われわれの祖国を解放して、われわれ自身の主権を確立することにありました。アルゼンチンの五月革命は、将軍によって国境を越え大陸規模で拡がりました。将軍の勇猛な行動は、アンデスをまたがってアルゼンチン、チリを解放し、またのちにペルーの独立を実現させました。軍隊を組織・編成し、規律、指揮系統の徹底を図ることで、独立を達成するにふさわしい軍隊を作りあげたのは、まさに将軍の戦略的能力のおかげです。



サン・マルティン将軍胸像

ここで触れておく意義があると思いますが、サン・マルティンはクージョにて次の展開に備えて構想を練っていた時期にも、クージョ地方の教育の進歩や農業・工業の発展など知事としての任務を疎かにしたことはありませんでした。

歴史家のバルトロメ・ミトレは、「それが時の流れにせよ、成り行きの当然の帰結ににせよ、われわれの運命に将軍ほど決定的に影響を及ぼした者はいない。」と述べています。

すべての伝記作家は、軍人として、あるいは戦略家としての域を超えた将軍の人徳を讃えています。将軍は、崇高な精神、謙虚、質素、家族への温かな思いやり、人間についての鋭い洞察と理解を兼

ね備えておりました。将軍は公務からの完全な引退を決意しましたが、それは公民として尊敬すべきことでした。(作家であり教育者である)リカルド・ロハスは、サン・マルティンの生涯について記述した古典「El Santo de la Espada—剣の聖者」の序節で、「サン・マルティンは独立運動を通して、独立を果たした南米全土と繋がっている。また、その高潔な人格によって全ての民族と繋がっている。」と述べています。

アルゼンチン人は、将軍を祖国の父として、また見習うべき模範として位置づけております。将軍の生き方が若い世代への手本として大事にされて行くことを願っております。

ダニエル・カルバージョ チリ大使の挨拶

～サン・マルティン将軍とチリの独立～

ホセ・デ・サンマルティン将軍は、南米の解放に多大な貢献を果たしました。彼の優れた知性、先見性、ヨーロッパの戦争で培われた軍事技術は、我々の地域が独立を達成するために大変役立ちました。サン・マルティン将軍によって発案された南米大陸の戦略は、まず、チリに独立政府を樹立することでした。一旦、これが達成されれば、彼の計画は、チリからペルーへと進軍することでした。

サン・マルティン将軍は、大変な根気力と天才的な軍事能力で、アルゼンチンからアンデスの軍隊を率いて、高い山脈を乗り越え、チリに入り、チリのベルナルド・オヒギンス将軍の援軍と共に、1817年2月12日にチャブッコの戦いでスペイン人を打ち負かしました。両将軍は、サンティアゴに凱旋しました。サン・マルティン将軍は、チリの統治者になるよう懇願されましたが、その申し出を、寛大にもオヒギンス将軍に譲りました。

何故なら、サン・マルティン将軍の目標は明確で、ペルーのリマが彼の最終目標でした。

サン・マルティン将軍は、洞察力においても傑出していました。

チャカブッコの戦いの14ヶ月経た後も、スペインの軍隊は再び占領しようとまだチリ領土に残留していました。このような戦況のもと、決定的で最後の戦いが、1818年4月5日、サンティアゴの郊外にアルマイブの地で繰り上げられました。

オヒギンスとサン・マルティン両将軍による「マイブの抱擁」は、彼等が育んできた友情のシンボルとしてだけでなく、この偉大な勝利は、サン・マルティンの戦略の次のステップの為にも非常に重要でした。つまり、海路でペルーに到達し、スペイン軍の最も重要な要塞・ペルーで戦うという戦略があったのです。

同じ理想を分かち合いながら、オヒギンス将軍は、組織後間もないチリ海軍を、サン・マルティン将軍側に援軍させ、チリ海軍は前線に立ち、最後には勝利し、ペルーを独立に導いた大変重要な役割を担いました。サン・マルティン将軍の遺産は、今日に至るまで、有益であるほど傑出しています。首尾一貫してずっと持続され、又、先見性、信念、統率力などを伴った明快で確固たる目標は、偉業を成し遂げるための方法であるということ、我々に教えてくれています。

190年経た現在でも、この教訓は、個人にとって、また同様に国家にとっても有効です。

我々は、我々の未来を創るために尽力していく時、サン・マルティン将軍の例から学ぶべきでしょう。

ウーゴ・バルマ ペルー大使の挨拶 ～解放者ホセ・デ・サン・マルティン将軍に敬意を表して～

歴史は時として不思議な様相を呈するものです。ラテンアメリカ諸国の独立もその一つです。啓蒙主義思想と今日私達が人権や個人の自由と呼ぶそのビジョンに鼓舞され、植民地の都市は戦わずしてその権限を捨てるべきではないという信念に励まされ、全ての人に自由を、若しくは誰も自由にさせない、という夢と必要性からなる使命感に突き動かされ、何人かの人間が大陸全土を独立へと導いたのです。

ホセ・デ・サン・マルティンは、その中の一人です。彼は着想に富み、理想を求め、信念を抱いた人でした。彼の行動は、大胆でありながら論理的であり、彼の目的は広大で崇高なものであり、その振る舞いには飾り気が無く、高尚な目標をもっていました。軍人としての訓練を受け、武器を取ってアルゼンチン、チリ、ペルーの独立に尽力しました。戦略的なビジョンと類い稀な組織力に恵まれ、勝利においては寛大であり、敗北においては思想堅固であったことが知られています。彼は戦争や私的な権力を愛したが故に戦ったわけではありません。多くの人が望み、それが得られるのが当然である自由を獲得する術が他に無かったから戦ったのです。しかし、独立には責任が伴うことを決して忘れませんでしたし、日々の生活にあえぐ人々の全てが自由を得る為だけに導かれて行ったのだとは考えていませんでした。独立がもたらす



向かって右から；オセーラ公使、ポルスキ大使、カルバージョ大使、バルマ大使、五百旗頭学校長

であろう国家や政府や社会の形態に関心を抱いたのです。

彼の残した多くの偉業は別としても、彼の先見性や夢を思い起こし、これに敬意を表すべきです。国境を越えた戦いは、多様性を持つ偉大な祖国ラテンアメリカにおける新たな統一世界への幕開けであり、自由と民主主義と姉妹国家建設への序章であると思われました。しかし、そうではありませんでした。彼の生涯においてさえも、先見の明に欠ける個人的・国家的野望が、反目を解消し戦争でさえも防げるチャンスを逸するというラテンアメリカの歴史を生み出したのです。対話は行動によって変わってしまいましたが、ほぼ二世紀を経た今、私達が一緒に出来ることは何なのかについて未だに話し合いが行われています。私達が、彼の戦いと彼が残してくれたものに相応しかったのか、また相応しくあるのかは、歴史が判断することです。然しながら、人生に新たなチャンスが訪れ、私達がすべきことを行う方法を見出すことが出来るかもしれません。その日がきたら私達はこう言うことでしょう。「解放者サン・マルティンよ、あなたは最初から正しかったのです。あなたの導きが無かったから道に迷いました。でも今は、すぐにではありませんが、あなたの夢に団結し、あなたがその為に行った新しい時代の幕を開けるのです。もしあなたの夢が実現するなら、決してそれが遅すぎるということはありません」

(かとう かつみ；当協会常務理事)

8月6日(月)

サン・マルティン将軍胸像に献花参拝ツアー

当協会が社団法人として発足以来50周年に当たる今年の記念行事の一つとして、会員ご家族相互の一層の親睦並びに日・ア両国の一層の友好を願い、8月6日(月)、午前10時に晴海埠頭から海上自衛隊護衛艦に乗船、横須賀港着、防衛大学校構内同将軍胸像に献花するツアーを企画しました。

詳細は、「協会のイベント案内」をご覧ください。

「50年読みつがれる書物にしておきたい」

～林屋永吉さんとの1時間～

きき手 河崎 勳

戦後まもなくメキシコで日本大使館開設に奔走中、メキシコ外務省のオクタビオ・パスと知り合う。のちにノーベル文学賞を受賞する詩人外交官である。俳句を愛したパスが芭蕉のスペイン語共訳を持ちかけてきた。林屋さんが足のけがで1か月入院と決まった時、「パスは手を打って喜びましてね」。出勤できないが時間の余裕はできた林屋さんが、ベッドの上でギブスをはめた足を投げ出して翻訳を続け、「その原稿をパスがひったくるようにして片っ端から手を入れて」、『奥の細道』のスペイン語版『Sendas de Oku』ができあがった。この俳書の初めての外国語完訳である。今年はその出版50周年になる。

コロンブス関係は単独翻訳で2冊出した。このうち岩波文庫の『コロンブス航海誌』は30年間で29刷を重ねている。「コロンブスが金の国日本に憧れたのがあの大航海の一つの動機であったのは確かなことです。私の目的は、コロンブスが残した記録を完全な形で日本人に提供することでした」

サラマンカ大学の日本学専攻学士課程の創設、由緒ある中世のパイプオルガン修復などでも、培った人脈を使いオルガナイザーの能力を発揮して先頭に立ってきた。

この学究肌の外交官も最初から優等生という訳ではなかった。京都の旧制中学時代は、「お前、本当にあの秀才たちの弟か？」と、何かにつけて3人の兄と比較されて劣等感を味わっていた。兄とは、のちに歴史の教授になる林屋辰三郎さんらである。「早く日本を抜け出して知らない人ばかりの外国に行きたいと、そればかり考えていました」。外務省語学留学生として3年間スペインに留学し、ここでの猛勉強がのちの活躍の基礎になる。

2006年10月、88歳になった林屋さんの米寿を祝う盛大な会が東京で開かれた。翌月は出版の打ち合わせのため13時間飛んでメキシコにいた。東京に帰ってきて3日目、講演会でスペイン内乱後の経験を語っていた。今年3月にはスペインで講演してきた。



林屋永吉（はやしや えいきち）さん
アルゼンチン領事、ボリビア大使、スペイン大使を歴任。本省勤務時兼務で東大、その後上智大等で教鞭。マヤ神話『ポボル・ヴフ』、『ユカタン事物記』など著訳書多数。現在、日本ボリビア協会会長、サラマンカ友の会会長、日本アルゼンチン協会理事。

温厚でいつもにこやか。どこにファイトが隠れているのか。食事を共にすると、その健啖ぶりに驚かされる。この食欲と、海外へ行っても欠かさない毎日の散歩がどうやら元気と健康の秘密らしい。「ゴルフ？海外では時々コースに出ましたけれど。日本じゃ1日ばかりですから時間がねえ」

アルゼンチンには、1959年から5年間領事として駐在した。日本人の働きぶりは世界中で認められている。しかし“日本人は正直だ”という人格面からの評価をしてくれるのはアルゼンチンだけだと実感した。ここは沖縄出身の移住者が圧倒的に多い。この人たちのクリーニング店では物がなくならない。栽培する花はきれいで長持ちがする。アルゼンチン市民の身近

なところで信頼を築いてきた。「アルゼンチンで今のよう日本人の評判が高いのは、沖縄県人の功績ですよ」
領事としては、アルゼンチン政府にかけあって、入植者への融資にかかる税金を無税にしてもらったり、不法入国の移住者に市民権を認めてもらったりした。「日本人には好意的でしたが、よくやってくれました。懐の深い国ですよ」

—アルゼンチンの人たちが憧憬の眼差しでスペインを見る目と、スペイン人がアルゼンチンを見る目の間に落差がありませんか？

「昔は落差が大きかったですよ。アルゼンチン人はスペインを含めてヨーロッパに自分たちのオリジンを見えています。一方スペインは、あそこは元の植民地という意識から抜け出せないところがありました。が、今ではどうでしょう。恵まれた土地に育った異色の親類に憧れを抱いているスペイン人は多いと思いますね」

—後輩へのアドバイスを？

「88という歳になって見ると、あああの時、どうしてあれをフォローしておかなかったのかと思ひ出して惜しい

思いをすることがたびたびあります。興味を感じたことは、そのうちにと思わないで取りかかることですね」

—これから何を？

「歴史的なものは新しい研究がどんどん出てきますから、どんな著作でも古くなります。私の出したもののうちス

ペイン語の『奥の細道』は、去年手を入れ直しました。マヤ神話の日本語訳は、三度目に手を入れたものがもうすぐ出ます。コロンブスもそろそろ手を入れるつもりです。これはなかなかの大仕事ですが」

(かわさき いさお；当協会理事)

亜国政治経済短信

～安定と高成長のアルゼンチン～

荒尾 保一

1. キルチネル大統領の演説

キルチネル大統領は、3月1日の通常国会の開会にあたり、大統領就任以来の4年間の業績を総括し、次のように演説した。

「亜国は、最悪の時期を克服し、平等を伴った成長と持続的発展を実現するための新しい段階に入った。

経済は、5年連続で8～9%の高い成長を続けており、インフレ率も毎年下降している。貿易収支も改善し、失業率も06年第4四半期は8.7%にまで改善された。

貧困層の減少、高齢者への社会保障も実現している。司法改革、人権の擁護、テロ対策等もその実を挙げている。」

この演説は、確かに亜国の政情の安定と高成長の現状を反映している。しかし、後述するように、政治経済ともに、不安要因を内包していることも事実である。

2. 政治状況

(イ) キルチネル大統領は、就任以来、現職の強みを活かして、ペロン党のみならず、急進党などにも支持層を広げている。

特に、2005年10月の中間選挙において、同大統領派の「勝利のための戦線」が、上院の過半数(72議席中42議席)、下院の過半数近く(257議席中約110議席)を占め、その後も同派に加入する議員が続出し、国会を完全に掌握した。

(ロ) 同年11月内閣改造を行い、閣内で大統領に批判的であったラバーニャ経済相を更迭し、実務型の内閣を作り上げた。

(ハ) 国会での多数を制した大統領は、大統領令(政令)に法律と同等の効力を持たせる法律や、国会で可決された予算を変更する権限を首相に認める「超権限法」を成立させるなど、行政権の強化を実現した。

また、最高裁判所の判事の定員を5名に削減して、

最高裁判事の構成に与党の意向を反映し易くするなど、司法権へのコントロールを強めた。

更に、議会のみならず、各州の知事選挙などでも絶大な影響力を持つに至っている。

(ニ) 今年10月28日、大統領選挙が行われるが、ラバーニャ前経済相、ムルフィー国家再建党党首が既に対立候補として立候補の意向を明らかにしている。しかし、上記の政治状況においては、キルチネル陣営が勝利する可能性が極めて高いと見られている。

しかし、6月に行われた注目のブエノスアイレス市長選挙において、大統領が推す候補が、野党PROのリーダーのマクリー氏に敗れるという事態が生じた。

キルチネル派は、この数カ月、同派の大統領候補は、大統領自身か、クリスティーナ大統領夫人(上院議員)かを明確にしてこなかったが、最近、大統領夫人の出馬が内定したと報道されている。

3. 対外関係

(イ) キルチネル大統領の最近の動きで最も注目されるのは、ヴェネズエラのチャヴェス大統領との関係である。石油価格の高騰に伴い外貨の豊富なヴェネズエラからの外貨借入れの増大、亜国企業のヴェネズエラへの進出などで関係が深まっているが、チャヴェス大統領の反米的言動に直接間接の支持を与えているとも見えるキルチネル大統領の行動に、国内でも戸惑いが見られる。

先ごろ、ブッシュ大統領がラ米5カ国を訪問したが、隣国ウルグアイにブッシュ大統領が滞在しているまさにその時に、ブエノスアイレスで、民間主催とはいえ、反ブッシュ大会が開催され、亜国を公式訪問していたチャヴェス大統領がこの大会に出席して、ブッシュ大統領批判の演説を行った。

これを黙認していたアルゼンチン政府に対し、さすがに米国も公開の席で苦言を呈した。

(ロ) 歴史的に最も良好な関係にある国と言われてきたウルグアイと、パルプ工場の建設問題で対立し、スペイン国王の特使による仲介が行われているが、解決の目途は立っていない。

(ハ) メルコスールについては、ヴェネズラが正式加盟の途中であり、またボリビアの加盟も検討されている。ブラジルはチャヴェス大統領批判を強めており、メルコスールが今後どのような形になってゆくのか注目される。

(二) 英国との間で締結されていたマルヴィーナス周辺海域の石油資源の共同開発協定を亜国側が破棄し、両国関係の改善の見通しは更に先延ばしとなった。

4. 経済情勢

(イ) アルゼンチン経済は、依然好調で安定的な成長を続けている。

2006年を回顧すると、GDPは8.5%の伸び、工業生産指数は8.3%の伸びであった。

最も注目された消費者物価指数は+9.8%で、前年の+12.3%をかなり下回った。失業率も、06年10～12月期で8.7%と一桁台に低下した。

国家財政も健全で、プライマリー・バランスは231億ペソの黒字、総合収支でも116億ペソの黒字であった。

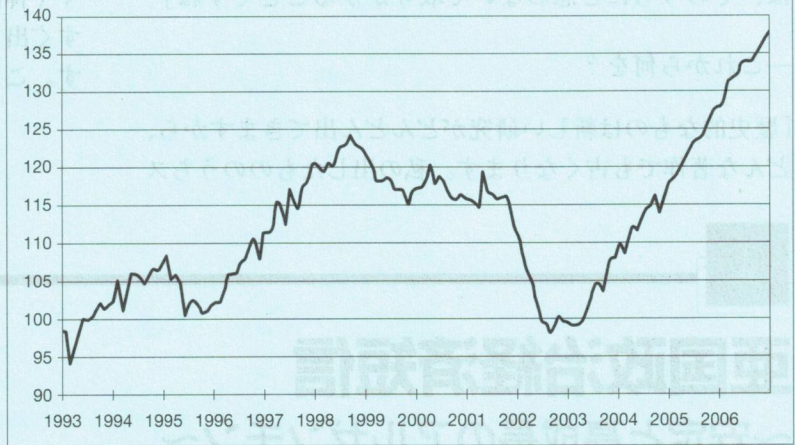
カントリーリスクは、最悪期（02年末）の6.358から06年末には217に改善している。

(ロ) 2007年に入っても、この傾向は継続している。GDPは1～3月累計で対前年同期比8.6%の伸びであった。インフレ率については、Indecの発表（その数字の信頼度に疑問を呈する向きもあるが）では、1月1.1%、2月0.3%、3月0.8%、4月0.7%の上昇で、1～4月累計の上昇率は、3%となった。

税収も依然好調で、3月は139億ペソの収入であった。大統領の最近の演説では、5月は180億ペソの税収見込みで、これは史上最高であるという。亜国中銀の外貨準備も順調に増加しており、5月21日400億USドルを突破した。2002年7月には90億ドル、IMFに債務全額を返済した06年1月には186億ドルであったから、最近の増加のスピードは驚異的である。

(ハ) 上記のように、最近の経済成長は著しいものがあるが、これを1993年以降の経済活動指数で見ると、図のとおりである。すなわち、亜国経済は、

経済活動指数の推移



1998年に一つのピークに達する。その後一進一退を繰り返していたが、2002年の経済危機で一気に落ち込む。そして、これをボトムとして回復に向かうのだが、1998年の水準に回復したのは2005年であった。経済危機の落差の大きさを実感させられるが、逆に2年前になって漸く10年前の水準まで戻り、現在はそれを上回って成長しているというのが実態であるとも言えよう。

5. 今後の問題点

以上のように、亜国は順調な発展を遂げつつあるが、その裏側に様々な問題点を内包していることも否定できない。

現政権の最大の政治目標は、インフレの抑制にあるが、そのため人為的な価格協定や政策価格の凍結が行われている。賃金、エネルギー価格、運賃などが何年にもわたって据置になっている業界も多い。

このため、最近、航空、バス、地下鉄、トラック運送業などでストライキが頻発している。大統領の地元での教職員組合のストライキでは、警官との衝突で死者が出ている。

ガソリンやディーゼルオイルの不足も常態化しており、また冬季を迎えようとしている現在、停電やガスの供給不足が多発している。農産品も価格据置に抗議して出荷拒否が起きており、市場に食肉が不足するというアルゼンチンでは考えられないようなことが起きている。

現在、国際的に一次産品やエネルギー価格が高騰している中で、製品あるいはサービスのコストの合理化ではカバーできない部分が生ずる例は、世界各国で生じている。亜国は、製品又はサービスへの補助金などで当面の対策を講じているが、基本的には、国際的な要因に基づくコストの上昇とインフレ抑制という至上政策との相克に悩んでいるというのが現状であるように思われる。

(あらお やすいち；当協会常務理事)



今、ブエノスアイレスが面白い！

小木曾 モニカ



Palermo viejo resto; 旧パレルモ地区

アルゼンチンは2001年に深刻な債務に直面しましたが、2004年以降、経済が急速に持ち直し、既に経済危機前のレベルを取り戻しており、今、ブエノスアイレスの街は新しい活気で溢れています。

当時リストラされたクリエイターたち（デザイナー、芸術家、起業家達）は、アルゼンチン人の個性をと創造力を活かし、経済危機の中で生き残るために自らプロジェクトを立ち上げ、安くレンタルできるパレルモ地区の古い家をアトリエに改造しました。これが今、最も注目されているエリア、作家ボルヘスの由来の地「パレルモ・ソーホ」ブームの始まりです。

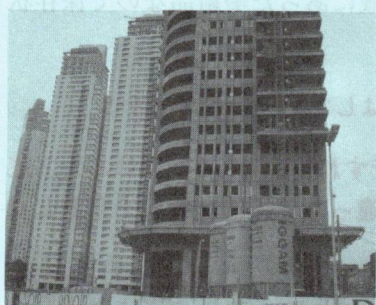
コロニアル風、そしてヨーロッパ式の建物は、オリジナルブランドや有名ショップやレストランに変身し、石畳と並木道の風景は数年前とは大分違ってきました。

その結果2005年にはユネスコがブエノスアイレスの街をデザイン都市と認定しました。

現在、年に2回（3月と9月）行われる「ブエノスアイレス・ファッションウィーク」には、コレットやNYのバーニーズのバイヤーも訪れ、アルゼンチンのギャラリーアートが集まる展示展「Arte Ba」や若者アーティストを応援する「Estudio Abierto」なども開催され、デザインとアートはタンゴに次ぐ新しいこの街の「宝物」になりました。

また、プエルトマデロ地区には、フランス人デザイナーのフィリップ・スタルクが現地デザイナーたちと手がけたデザインホテル、ファエナ・ホテルに続き、5月革命200年祭（2010年）には、英国人建築家のノーマン・フォスターが仕掛けた街の中の街、「El Aleph」が完成されます。まさに新しいランドマークになるでしょう。

これ以外、街の様々な場所で新しいビルが毎日建っていくのが見かけられます。中流階級が集中するカバジート区、裕福な地区ベルグラノやガデルのアバスト地区まで建設ブームが広がっています。ボルテーニョ（ブ



Puerto madero construction;
プエルト・マデロ地区

エノスっ子）たちは、近所の景色が変わるのでこの建設ラッシュを快く思いませんが、ヨーロッパやアメリカなどから訪れる外国人たちは、ブエノスアイレスがラテンアメリカの街でありながら、ヨーロッパの街並みの

の雰囲気を持っていることに惚れ込み、マンションを購入し、ブエノスアイレスと母国を行き来して過ごす人も増えてきました。

彼らのような外国人は、アサード（炭焼肉）はもちろんのこと、この数年人気になった現地人経営の「スシ」がでるレストランや、最近最も注目されている、ペルー出身のアンデス風料理とアルゼンチン北部風土料理のレストランの常連です。そういった店では、トウモロコシやイモまめ類を使ったアンデス料理と、日系人が多く住んでいるペルーの魚・醤油・生姜などの食材を取り入れた日系人の料理を混ぜ合わせ、新しいフュージョン料理を生み出しました。ブエノスアイレスでも人気になり、ボルテーニョの注目を浴びています。

また外国人たちは、この街で見逃せないタンゴにも関心があり、130件もあるタンゴのダンスホール、ミロンガにも通っています。現地の若者たちもタンゴに魅せられ、ダンスそして演奏する若いアーティストもたくさん増えました。Orquesta Fernandez Fierro, Color tangoなどが代表するオーケストラです。そして、若者に人気があるエレクトロニック・タンゴという新しい分野のタンゴを演奏するグループ（Ultratango, Tanghetto, Narcotango）も現れました。ブエノスアイレス市は毎年、「タンゴフェスティバル」と「世界タンゴ選手権」を開催し、アルゼンチンそして外国からも参加する大イベントになりました。

こうして、経済危機の後、個性と創造性を通じて新しいデザインやアートが生まれ、忘れかけていたタンゴが再開し、現地の料理を見直すなど、自国の製品や人物、資産を大切に作る気持ちが深まりました。その一方、外国人が長期滞在したり、多くの観光客が訪れたりなど、外からの新鮮な風が吹き込んで、街の活気を盛り立てるのに貢献しています。このように外国人と現地アルゼンチンのエネルギーが刺激しあって、ブエノスアイレスは創造的で活気に溢れる街になりました。

是非、日本の皆さんもアルゼンチンへお越しになって、観光ツアーでは観られないブエノスアイレスをご覧になって下さい。

（こぎそ モニカ）

日系2世、ブエノスアイレス州、エスコバル市出身。サルバドル大学観光学科卒業し、大阪外大へ留学。帰国後、日本、中国や東南アジア専門の旅行会社に勤務。現在旅行コンサルタントの仕事と同時に企画イベントコーディネーターとして日本の雑誌、テレビ番組などでアルゼンチンを紹介している。

monchikogiso@gmail.com



ブエノスアイレス国立美術館に 先住民作品常設展オープン

～マリア・ホセ・エレラ女史、マリア・フロレンシア・ガレシオ女史に
現地インタビュー～

インタビューー イレーネ 賀集

ブエノスアイレス国立美術館に南米先住民の作品の常設展示がオープンしました。この展示を提案し実現させた二人の学芸員、マリア・ホセ・エレラ女史とマリア・フロレンシア・ガレシオ女史にインタビューしてきました。

イレーネ： どのような経緯で国立美術館にコロンブス以前の美術品の常設展示がなされることになったのですか？

エレラ女史： 美術館の中にコロンブス以前の美術品を常設展示するのは今回が初めてなのです。民族学や人類学の観点からの展示は既にいくつかの博物館に存在しますが、芸術的な観点からの展示は初めてなのです。今まではこれらの品々は美術品として扱われることなく、単なる古器として扱われていたのです。我々は美術品としての価値を尊重しそれが持つ機能はあまり重要視しませんでした。これらの美術品が作られた時代には芸術という概念が存在しませんでした、芸術・政治・宗教がはっきりと区別されていなかったのです。これらを作った人々は美術品を作っているとは思っていなかったわけです。

ガレシオ女史： しかし美しいものを作りたいという気持ちは持っていたのです。例えば、人の顔を描くときに眉毛と鼻を整ったT字型になるように描いてあります。このような描き方は様々な時代の様々な文化に見られます、これはいわゆる原始芸術（プリミティブ・アート）に良くある特徴です。美術史の中では美しいと思われるものは時代が変わっても、文化が変わっても変わらないのです。



筆者（左）、エレラ女史（中）、ガレシオ女史（右）

イレーネ： ところで常設展示されている美術品の数はどれくらいありますか？

エレラ女史： 三つのコレクションの中から60点を展示しています。ギード・ディテラ元外務大臣が収集したもの、フリドマン・コレクションとルス・コルクエラさんが最近寄付したものです。ディテラ氏のコレクションは一部美術館に寄付していただ

いたものと政府が購入したものと二種類があります。

イレーネ： 常設展示はテーマごとに分かれていますか？

エレラ女史： はい。テーマは4つに分かれています。一つ目は「石の精霊」で石から作られたものです。二つ目は「象徴的な世界」で幻覚剤を飲んで見えてくる世界のことで、人間や動物・植物の形をしたもので儀式に使われていた道具です。三つ目のテーマは「権力」で、金属と戦争に関係しています。四つ目のテーマは「織物」です、たいへん古いものですが非常に乾燥したペルーの海岸地域にあった美術品なので保存状態が良いのです。

イレーネ： 時代分けはしていないのですか？

ガレシオ女史： そうですね、年代順の配列はあえて避けました。博物館とは違って美術的な要素を重視したかったからです。

イレーネ： 話は変わりますが、エレラさんとガレシオさんはどのようなキャリアをお持ちなのですか？

エレラ女史： 我々は1987年から国立美術館で働いています。ブエノスアイレス大学で哲学・文学部の美術史を専攻しました。我々は美術史と博物館学両方の知識を持っているのでこの仕事に選ばれたのです。この二つの分野は大きく異なります。歴史学者として優れているだけでは、どのような展示をすれば人々に美術品としての良さが伝わるかは解らないかもしれません。学芸員はこの二つの要素を常に考慮しなければならないのです。更に美術品の保護にも気を配りました。作品が痛まないように特別な飾り棚と特別な照明を用意し作品を置く布も特別に作らせました。当然展示室の湿度も常に管理されています。

ガレシオ女史： 我々はコロンブス以前の美術史や考古学の専門家ではないので、展示の準備をする際にそれぞれの分野の専門家に相談し完成するまで1年半かかり2005年11月16日にオープンしました。また会場に流

れている音楽は実際に原住民の楽器を演奏して録音しました。訪れた方はまるで原住民の儀式に参加しているように感じると思います。

イレネ： 最後になりましたが、先ほど「いわゆるプリミティブ・アート」とおっしゃいましたがなぜですか？

ガレシオ女史： この言い方は時代遅れなのです、実際に我々は使っていません。「プリミティブ」という言い方をしているのはヨーロッパを世界の中心だと思っているヨーロッパ人なのです。彼らはルネサンス以前の芸術は全部プリミティブだと思っているのです。

イレネ： 本日は大変興味深いお話ありがとうございました。

(イレネ ガシュー；当協会理事)



眉毛と鼻を、整ったT字型で表した顔のある作品



ブエノスアイレス国立美術館

Photo by Irene Gashu



タンゴ名曲ものがたり(2)

～「エル・チョコクロ」～

石川 浩司



アンヘル・ビジョルド

タンゴの有名曲といえば、まず思い浮かぶのは前号で取り上げた「ラ・クンバルシータ」であろうが、それに続くのは「エル・チョコクロ」或いは近年若手愛好家の支持が高いピアソラの「リベルタンゴ」であろうか？

「エル・チョコクロ」はもう100年以上も昔に作られた古いタンゴだが戦後英語の歌詞が付けられて「キッス・オブ・ファイアー」の題で世界的に流行した。当時わが国でもラジオのヒットパレードの常連曲になったから当協会会員の皆様にとっても青春の思い出の1曲なのではなからうか？

この曲を作ったアンヘル・ビジョルド(1861～1919)は新聞社の植字工だったが美声の持ち主でギターも上手く、作詞の才能もあった。いまで言えばシンガーソングライターの草分けと言えるだろう。「エル・チョコクロ」とは南米スペイン語では「とうもろこし煮込み鍋」でビジョルドの好物だったという話もあるが真偽のほどはわからない。初演は1903年11月3日レストラン「アメリカーノ」に於いてであったと記録がある。まだタンゴは揺籃期で日の当たる場所で演奏されることが少なかった時代に初演の日付も場所もわかるというのも不思議なのだが、これは当時下町の下流社会で流行しはじめたタンゴに上流社会が興味を示してパーティか何かで取り上げたい。演奏はロンカージョ指揮するサロン・オーケストラだったが、上品な会場でこの曲がタンゴであると紹介するのは憚られたらしく「舞曲」としてプログラムされたのだそうだ。

ビジョルドは勃興期にあったタンゴの普及のためにいろいろ尽力したが、その一つに「エル・チョコクロ」と1905年に友人のエンリケ・サボリードの曲に自らが作詞した「ラ・モローチャ」の楽譜を一千部印刷して軍艦に乗務する知人に託し寄港地でこれを頒布してくれるように依頼したという。筆者はこの軍艦というのは当時世界一周航海に出た練習艦「サルミエント号」だったのではないかと推測している。同艦は現在ブエノスアイレスのラブラータ河畔に繋留されて博物館として公開されているから此处を訪問されたことのある会員の方もおられるだろう。筆者も2002年に見学したことがある。艦内に展示されているデータによると同艦の第7回航海は1906年2月8日にブエノスアイレスを出航し11月30日に帰

港しているが途上上海～釜山～長崎～呉～横浜～シドニーという経路で日本にも立ち寄っている。1906年(明39)といえは日露戦争が終わった翌年で例の「日進・春日」をアルゼンチンから譲り受けて艦隊に加え日本海海戦に勝利した翌年であり、アルゼンチンの練習艦が入港したとあれば大歓迎されたことは想像に難くない。しかしそれに代えて「エル・チョコクロ」が演奏されたという記録は残念ながら残っていない。もしそれが実現していれば、これが日本に於けるアルゼンチン・タンゴの初演ということになるのだが、当時の新聞記者にスペイン語で歌われる西洋音楽を理解し報道する人が居なかったとしても致し方のないことだろう。



「エル・チョコクロ」
初版楽譜表紙

さて「エル・チョコクロ」はその後器楽曲としてしばしば演奏されエドアルド・アローラス楽団をはじめ1910年代の録音がいくつかCDに復刻されている。1930年代には歌手のマランビオ・カタンが新しい歌詞を書いて楽譜が再版された。これはアンヘル・バルガスなどによって歌われ相応のヒットをしたが「エル・チョコクロ」をさらに飛躍させたのは「ジーラ・ジーラ」の作者、エンリケ・サントス・ディセポロである。ディセポロは1947年にメキシコ映画「グラン・カシーノ」でリベルタ・ラマルケが歌うために新しい歌詞を付け、これが大ヒットになったのであった。その歌詞は「このタンゴによって“タンゴ”が生れ、まるで叫び声のようにうす汚い場末から



ブエノスアイレス河畔に繋留されている「サルミエント号」
先頭は下船する筆者夫妻

“空”を求めて飛び立った・・・”というものであった。戦後わが国でも公開されたアルゼンチン映画「タンゴの歴史」ではそのフィナーレの場面でフランシスコ・カナロ楽団の演奏と女優ティタ・メレーロの歌で、このディセポロの詞による「エル・チョクロ」が上演されたが、そ

の迫力にド肝を抜かれたものである。多分これらの映画が契機となって1952年にジョージア・ギブスが英語版「キッス・オブ・ファイアー」を歌った。これがディセポロの歌詞の通り全世界を席捲したのである。

(いしかわ ひろし；当協会理事)



Resumen en castellano

por Irene Gashu

Asociación Nipo-Argentina y relación entre ambos países (p. 1)

por Isao Kawasaki

Este año nuestra Asociación cumple 77 años desde su creación y 50 años desde su registro como persona jurídica social. La relación de Argentina y Japón comenzó en 1898 cuando se firmó el tratado de amistad entre ambos países. Justo antes de la Guerra Ruso-Japonesa, Argentina cedió dos acorazados a la Armada Japonesa. Durante la Guerra de las Malvinas, Japón se abstuvo de imponer sanciones económicas a Argentina. En 1998 se realizaron muchos eventos para celebrar el centenario de la firma del tratado de amistad. La Asociación publicó 2 libros. La relación entre ambos países a través de la Armada, el tango y la inmigración, es profunda.

General San Martín (p. 3)

por Katsumi Kato

El 30 de mayo de 2007, el Embajador Daniel Polski de Argentina, el Embajador Daniel Carvallo de Chile, el Embajador Hugo Palma de Perú y el Rector Makoto Iokibe de la Academia Nacional de Defensa depositaron una ofrenda floral frente al busto del General San Martín en Yokosuka. Presentamos aquí las palabras pronunciadas por los tres Embajadores durante la ceremonia.

Quiero que mis libros sean leídos por 50 años (p. 6)

por Isao Kawasaki

Una hora con Eikichi Hayashiya, Cónsul Japonés en Argentina, Embajador en Bolivia y España. También tradujo “Sendas de Oku” al español con Octavio Paz y 2 libros sobre Cristóbal Colón al japonés. ¿Qué consejo le daría a los jóvenes? “Ahora que tengo 88 años, me arrepiento de no haber hecho algunas cosas. Por eso, yo les diría que no dejen de hacer algo que les interesa, que no lo dejen para después”.

Situación política y económica de Argentina (p. 7)

por Yasuichi Arao

El Presidente Kirchnér en su discurso de marzo

manifestó que el país superó la crisis económica y destacó el quinto año consecutivo de crecimiento elevado (entre 8 y 9 %); pero la realidad es que tanto en materia política como económica existen muchos problemas. El actual gobierno se encuentra en la disyuntiva entre cómo hacer para contener a la inflación y hacer frente al aumento internacional de los costos.

¡Buenos Aires es la ciudad del momento! (p. 9)

por Mónica Kogiso

Palermo Soho es el lugar de reunión de diseñadores, artistas y empresarios. En 2005, Buenos Aires fue elegida como la Ciudad del Diseño por la UNESCO. En Puerto Madero se inauguró el Faena Hotel y en el año del bicentenario, 2010, abrirá sus puertas El Aleph, una ciudad dentro de la ciudad. Además de los asados, ahora hay restaurantes que se especializan en comida andina. A los jóvenes les atrae el nuevo tango electrónico. ¡Vengan a visitarnos!

Sala Permanente de Arte Precolombino Andino en el Museo Nacional de Bellas Artes de Buenos Aires (p. 10)

por Irene Gashu

Entrevista a las curadoras María José Herrera y María Florencia Galesio. Es la primera vez en Argentina que se inaugura una sala como ésta en la que se trata de mostrar los valores estéticos de las piezas más allá de los funcionales. Se exhiben 60 piezas de 3 colecciones: Guido Di Tella, Fridmann y Ruth Corcuera.

Serie Melodías Memorables Parte 2

El Choclo (p. 12)

por Hiroshi Ishikawa

Si no existiera “La Cumparsita”, la melodía de tango más famosa sería “El Choclo”, que fue compuesta hace más de 100 años por Angel Villoldo. Fue estrenada en 1903 en el restaurante “El Americano”. Varios autores le pusieron letra pero la más conocida es la que le puso Enrique Santos Discépolo en 1947 para que la cantara Libertad Lamarque en una película mexicana. En 1952 fue cantada en inglés como “El beso de fuego”.

協会のイベント案内

1. 護衛艦乗艦体験航海（晴海—横須賀）と サン・マルティン将軍胸像献花参拝 —社団法人ア協会発足 50 周年記念行事

8月6日（月）10:00、東京港晴海埠頭から、海上自衛隊護衛艦に乗艦して横須賀港に到着（約2.5時間）、その後、防衛大学校に移動して校内のアルゼンチン独立の父、サン・マルティン将軍胸像に献花参拝するツアーを実施いたします。

当協会が社団法人として発足以来今年が50周年に当たることであり、会員の皆様相互の一層の親睦と日本・アルゼンチン両国間の一層の友好を願って実施する協会主催記念行事であります。

会員の皆様には、ご家族（お子様、お孫様も含め）、ご友人をお誘いの上、出来るだけ多くの皆様の参加をお待ちしています。

すでに会員の皆様には、郵便往復はがきにてご案内・参加返信状をお届けしましたが、まだ若干の時間的余裕ありますので、参加ご希望の方は、7月23日（月）までに、下記何れかの方法で、協会までご連絡下さい。

電話:03-3501-4684

Fax:03-3595-3932

Mail:argentina@nifty.com

これは、海上自衛隊の格別のご厚意により、東京晴海埠頭から護衛艦に乗船（往路のみ）して横須賀港に行く計画で、行事行程は次の通りです。

参加者には、7月末日までに、集合場所、集合場所への利用交通手段等詳細をご連絡します。

1. 日時：8月6日（月）

09:30	東京晴海埠頭に集合
10:00	護衛艦に乗艦、出発
12:30～13:00	横須賀港着
13:00～13:30	防衛大学校構内、サン・マルティン将軍胸像に献花。 その後、現地解散

2. 参加費：横須賀港下船以降の移動用バス手配等実費として、500円/一人を予定下さい。

2 第11回「タンゴ音楽の集い」は、新会場で

7月17日（火）18:30から、会場も新たに開催します。

新会場は、交通至便なJR新橋駅のすぐ近く、当協会事務所の隣ビル、光和ビル・地下2階大ホールです。充実した映像・音響設備を備えた新会場で、石川当協会理事の名解説のもと、素晴らしい映像とタンゴ鑑賞の2時間となるものと思います。

今回のテーマは、第1部「7月ゆかりのタンゴ」、第2部「映画とタンゴ」で、またまた貴重な映像が鑑賞できると期待されます。

詳細は、会報に同封の案内状をご高覧のうえ、協会事務局宛ご来場の程ご連絡ください。

協会の活動報告

1. 第51回通常総会

第51回通常総会が今年もポルスキ駐日大使のご好意により、在日アルゼンチン大使館小講堂に於いて5月29日（火）開催された。外遊中の土屋会長に代わり友國副会長が議長を務め、総ての議案が滞りなく承認・可決された。正会員103名（法人会員27社、個人会員76名）の内31名が出席、委任状提出者37名を加え、有効な出席者数は68名と定足数（過半数）を十分クリアした。

本年度は理事・幹事の改選期に当たり、再任を含め33名の理事と2名の監事が選任された。これ等新役員の名は登記完了後に協会ホームページに掲載します。

平成18年度活動報告では、年度末の会員総数が正会員108名（法人27社、個人81名）、賛助会員137名、学生会員1名と個人会員中心に前年比増え、246名となったこと、文化事業として大使公邸での2回の懇親パーティーや石川理事の名解説による3回に亘るタンゴ音楽の集いが開催され、多数の参加会員、家族、知人に好



第51回通常総会

評を博したこと、土屋会長、木島理事長を始め協会幹部がアルゼンチン大使館、埼玉・アルゼンチン友好協会、茨城県長田小学校等の文化行事に積極的に参加したこと、新しい講師を招きスペイン語講座が再開されたこと等が報告された。また、会報やホームページの充実に努

める一方、FANA（在亜日系団体連合会）及び在亜日本商工会議所のホームページとのリンクを行ったことも報告された。

平成19年度活動方針としては、会員増による基盤強化、スペイン語講座やタンゴの集いの定期的開催など文化事業の推進、会報・ホームページの充実、ア国大使館・関係諸団体との協力関係の強化など前年度と同様の活動に注力するほか、特に本年は、本協会の社団法人移行から50周年に当たるため、これに相応しい企画の一貫として、海上自衛隊及び防衛大学の協力を得て、会員及び家族等を対象に8月6日（月）に晴海埠頭－横須賀港間の自衛艦体験航海と防衛大学のサン・マルティン將軍像への献花を行う企画が実現の運びとなったことが報告された。

決算・予算関係では、平成18年度収支決算は会費増、事業収入増、経費の削減等により収入5,746,067円、支出5,129,468円となり、616,599円の黒字となったこと、また平成19年度も18年度と同様の方針により収入5,712,000円、支出5,635,500円の黒字予算を組んだこと等が報告された。

最後に、木島理事長から事務局強化のため、今年度より原尚嗣氏が事務局長に就任したことが報告された。

2. 平成19年度理事会－新体制決まる

5月29日、通常総会に先立ち平成19年度第1回理事会が開催され、総会に上程される議案が承認された。また、同日総会終了後に、新たに選任された重任、新任の理事により平成19年度第2回理事会が開催され、互選により以下のとおり役付理事が決定され、新体制がスタートした。

会長	土屋 義彦	重任
副会長	友國 八郎	重任
同上	木島 輝夫	新任
理事長	木島 輝夫（兼任）	重任
常務理事	中野 恵正	重任
同上	白鹿 敦己	重任
同上	高安 宏治	重任
同上	鶴岡 忠成	重任
同上	加藤 勝巳	新任
同上	荒尾 保一	新任

3. 懇親会

総会に続き、恒例の当協会懇親レセプションが、ポルスキ大使のご厚意により、大使公邸で18:30から約2時間半に亘り開催された。

友國副会長の開会の挨拶、ポルスキ大使の挨拶、木島理事長の乾杯音頭で始まり、京谷弘司タンゴ四重奏団のタンゴ・ライブに、会場は盛り上がり、例年より充実、盛り沢山のアルゼンチン料理とワインに時を忘れて楽しまれた参加者は、150人近くで、大盛況だった。

加えて、当日は好天、心地よい微風で、屋外ベランダ

は参加者の楽しい歓談の場となり、音楽とワインの夜をエンジョイして頂くことができた。



懇親会開催



タンゴ演奏に聴き入って

4. 土屋会長、桜祭りに招待

4月13日（金）、当協会、土屋会長は、埼玉県秩父において開催された桜を見る会に在日アルゼンチン大使館オセーラ公使を招き（ポルスキ大使は地方出張で不在の為、同公使が出席）、満開の枝垂れ桜の中、長瀨の清流に浮かぶ船上で同公使と懇談した。

同公使より、日本に赴任して以来この3年間で最も印象深い思い出となったとの感想が事務局に寄せられた。

5. 目黒アルゼンチン・フェス

－アルゼンチン・ウィークは盛況に

現在目黒で開催中の在日アルゼンチン共和国大使館・目黒区共催のアルゼンチン・フェスティバルは、5月22日から5月27日を「アルゼンチン・ウィーク」と設定、ポルスキ大使夫妻をはじめ大使館員は、連日精力的に種々のイベントに活躍され、フェスティバルを盛り上げました。特に、5月26日（土）目黒区民センターホールで催された「アルゼンチンの歌と踊り－フォルクローレ」には、当協会会員が多数参加し、会場は立ち見客が出るほどの満席で、本場のチャランゴ、ギター演奏と民謡ダンサーの踊りに堪能した夕べであった。

特に、司会と進行役を舞台で務めたオセーラ公使秘書の柏倉恵美子さんの見事なバイリンガルでの進行、解説は、素晴らしい舞台と共に印象に残った。

当協会は大使館に協力し、250部のパンフレットを会員に配布した。

6. 長田小学校(茨城県境町)「アルゼンチンの日のつどい」

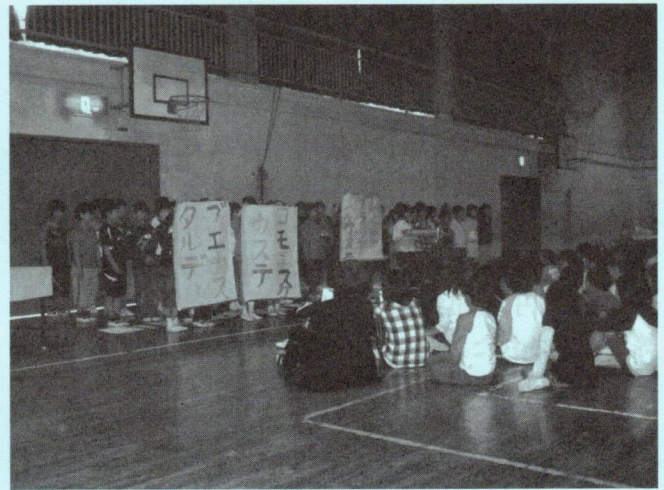
6月1日(金)、アルゼンチンと70年来の友好関係にある茨城県境町立長田小学校の恒例行事、「アルゼンチンの日のつどい」が、羽田校長以下全教諭・児童・PTA関係者の主催で、同小学校に於いて盛大に開催された。4回目の参加となる主賓のポルスキ大使を始めロドリゲス文化担当官夫妻、町長、町議会議員、教育長、友好功労者野本勇作氏など多数の来賓が招かれ、当協会からも鶴岡常務理事が参加した。

授業参観、アルゼンチン資料室見学、交流給食に続き



ポルスキ大使、ロドリゲス書記官夫人、習字にチャレンジ!

午後のイベントでは、児童によるスペイン語を交えての歓迎挨拶、アルゼンチンに関する研究発表、校歌とサンバの斉唱、大正琴による送迎などが手際よく行われ、心を打つ友好歓迎振りにポルスキ大使始め多数の来賓はいたく感銘を受け、大使も挨拶でこれを讃えて、交流が未永く続くよう強い期待感を表明された。ポルスキ大使の計らいでの、チャランゴの魔術師ルイス・ベラスケスとルイス・カルロス(ポーカル・ギター)のサプライズ出演は、児童達のやんやの喝采を浴びた。



スペイン語の研究発表



協会ホームページの活用お願い

<http://argentina.jp>

アルゼンチンにかかわる興味ある情報やイベント案内を出来るだけタイムリーに会員の皆様にお伝えするように、上記ホームページ(HP)の掲示板に載せることにしております。

掲示板には、誰でも自由に入れますので、どうぞ気軽にご意見など掲示板にお書き込みいただき、協会、会員間の情報交換の場として活用ください。

編集長よりの御礼

フロントページの版面は、今回も引き続き版画大家の星野美智子女史の作品を使用させていただきました。星野女史には、いつもながらのご厚意に対し厚く御礼申し上げます。

執筆・原稿につきましては、在日アルゼンチン共和国大使館並びに小木曾モニカさんのご協力をいただきました。

スペイン語のサマリー(Resumen en castellano)は、当協会理事のイレーネ賀集さんに作成していただきました。

末筆ながら、この場をおかりしまして、皆様のご協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成19年度年会費納入の御願い

本年度(平成19年4月1日から平成20年3月31日まで)の年会費のお振り込みがまだお済みになってない方は、早めにお振り込み、ご納入方お願い申し上げます。

個人正会員 : 1万円

個人賛助会員 : 5千円

本会報のデザイン、記事の無断転用はお断りします。

日本アルゼンチン協会会報 第50号 2007年7月11日発行

発行人 木島 輝夫(当協会副会長兼理事長)

編集長 加藤 勝巳(当協会常務理事)

編集発行 社団法人 日本アルゼンチン協会

〒105-0004 東京都港区新橋1-17-1

電話:03-3501-4684

FAX:03-3595-3932

E-mail:argentina@nifty.com

URL:http://www.argentina.jp

印刷 株式会社 アイデア・インスティテュート